

# 柏木教会月報

東京都新宿区北新宿 3-1-18

☎ 03-3368-2156

牧師 大浦 勝

## 死者に命を与える力

ヨハネによる福音書一一章一七～四四節

牧師 大浦 勝

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」(二五～二六節)

キリストはひとりの人間としてこの世に来てくださり、すでに学んだように、この世の荒れ野を悪魔の試みを受けながら、それと戦いながら歩まれたのであるが、この荒れ野の旅の最後にわたしたち人間を待ち受けているのは死である。わたしたちはさまざま人生を送るとしても、死は誰もが等しく、例外なく直面しなければならない問題である。肉となり(ヨハネ一・一四)、血と肉を備えた人間となって(ヘブライ二・一四)、この世界に来てくださったキリストも、わたしたちと同じようにその時を迎える。

わたしたちは多くの場合、自分の死に先立つて、まず自分の愛する者の死を経験し、その中で死と真正面から向き合われる。ラザロはキリストが特に愛しておられた弟子であった(一一・三参照)。彼の死は、姉妹のマルタとマリアにとつてと同様、キリストにとつても大きな悲しみであった。キリストはここで、愛する者の死といふ形で自分に襲いかかってきた死の力と対決される。

わたしたちは死が来ないようにと願いつつ、それが来るのでできるだけ遅らせるることはできるし、そのためには最大限の努力をし、手立てを尽くす。しかし、それが来た時には、もはや手立てを失い、無力に立ち尽くすばかり。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしよう」とマルタは言い(二一節)、マリアも同様に言つて(三三節)。ラザロは死んだのであり、もはやどんな可能性も期待することはできない。死は、わたしたちの愛や喜び、わたしたちの願いや祈りを嘲笑うかのように、最後の勝利者としてそこにいる。

しかし、キリストは人間にこの悲しみをもたらし、最後にすべてを嘲笑うかのように立つてこの死の力に對して、涙を流し(三五節)、心を騒がせ、激しい憤りをもつて(三三節)、全力で立ち向かわれる。「ラザロ、出て来なさい」(四三節)。するとラザロは葬られた時のままの姿で墓から出て来た。キリストは死と墓の支配を打ち破られる。ここに神の独り子としての栄光が現れてくる。もし信じるなら、わたしたちは神の栄光を見る。

人間となり、死の定めを負う者となられたキリストは、この定めをこ自分の上に引き受けて、これを打ち破つて復活された。従つて、キリストとの交わりはわたしたちの死をもつて終わらない。それを越えて続く。死はまことに厳肅な出来事ではあるが、もはや決定的な出来事ではない。わたしたちがキリストのものであり、キリストのいのちによつて生かされているということが決定的なことである。「わたしは復活であり、命である」(二五節)